



「利他の精神で子どもが高め合い、地域と共にある学校」

～ 一人ひとりの Well-being (幸せ) の実現を目指して ～

令和8年4月8日

第1号

さいたま市立常盤北小学校

常盤北小だより

2年目の「この指とまれ」

校長 中田 清人

季節が移ろいながら4月となりました。卒業式直前に開花した桜は、慌ただしく散りつつあります。春休み中の校庭に遊ぶ子ども達は、実に嬉しそうです。そんな光景を校長室の窓から眺めながら、本校で迎える2年目となる今、私は、改めてどのような学校を創りたいのか、どのような子ども達を育てたいのかを初心に帰るつもりで自問しています。

さて、児童の皆さん、保護者の皆様、ご入学、ご進級おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。4月1日付け人事異動の発令により教職員組織が整い、児童数330名、15学級、通級指導教室2、教職員47名で令和8年度の常盤北小学校がスタートしました。

4月1日、私は、教員になりたての頃からの教育信条を、再び教職員に語り、令和8年度の常盤北小学校の教育目標を共有しました。私の教育信条は、「私の教え子の幸せが、私の幸せである」というものです。私は若い時から、この「幸せ」という言葉にこだわりを持っていました。教え子たちが、社会で生き生きと活躍し、いつの日か、私の髪をカットしてくれたり、家の設計をしてくれたり、料理を作ってくれたりしてくれたらいいなと思っていました。こうしたイメージの中で、彼らは私に、笑顔で自分の技能について自慢したり、苦勞を乗り越えた話を得意げにしたりするのです。私は、教え子を、このように生き甲斐をもって、活躍できる人間に育てたいと考えていました。そして、それが実現している教え子も増えています。校長となった今、私の教え子の範囲は、教職員を介してさらに広がっています。校長は、言ってみれば「じいじ」です。

子ども達も、自分の「幸せ」を願い、学校で勉強したり、友だちと仲よくしたりしています。保護者の皆様、地域の皆様もまた、「子どもの幸せ」を願っており、我々教職員の大切なパートナーです。思いは一つです。ですから、例えば、我々教員と保護者の皆さんとの間に子どもを置いて話をすべきではありません。子どもを見る角度が違えば、子どもの違った面を見ながら話をすることとなり、意見がかみ合わなくなることがあります。それよりも、教師と保護者の皆さんとが寄り添い、同じ方向から子どもを見ることで、目標とするイメージが共有しやすくなります。この「角度の話」は、比喩としてでもあり、現実としてでもあります。私は、こうした互いに寄り添う、言い換えれば「協働、協同すること」の象徴として、「この指とまれ」という言葉をよく使います。今年度も「この指とまれ」の合言葉のもと、常盤北小学校の教育を力強く進めてまいります。

学校において、主人公は子どもたちです。しかし、子ども達を取り巻く我々大人も、一人ひとりが主人公の人生を生きています。目標や目的を共有した今、「やってもらおう」、「やってあげる」の関係ではなく、我々一人ひとりが主体的に、教育への営みを進めていきたいと考えています。「幸せ」を感じられたとき、誰もがヒーロー（主人公）となり得るのです。

「この指とまれ」を通奏低音としながら、目標達成に向け、子どもも大人も一人ひとりが自ら輝く、そんな学校づくりを目指します。